

宮沢賢治記念館通信

発行 〒025-0011 岩手県花巻市矢沢1-1-36

宮沢賢治記念館

☎ (0198) 31-2319
FAX (0198) 31-2320



お月さまは今はずうっと桔梗いろの空に
おのぼりになりました。
それは不思議な黄金の船のやうに見えました。

（『二十六夜』より）

賢治さんからの贈り物

作家・作曲家 佐藤三昭



2022年8月から3ヶ月間、自らが主宰するマリヴロン楽隊の「セロ弾きのゴーシュ」朗読音楽会を、花巻市、宮城県大崎市・大和町の小学校で11公演行わせてもらいました。2014

年、朗読に牛崎敏哉氏（宮沢賢治記念館学芸員）をお迎えして「宮沢賢治記念館コンサート」にて誕生したこの楽隊は、私が作曲・構成して、生演奏に乗せて賢治さんの作品のみを紹介するもので、詩や童話など様々な作品を上演してきました。楽隊名は童話「マリヴロンと少女」に登場する声

楽家の名に由来しています。昨年のゴーシュ公演も宮沢賢治記念館主催の「賢治の世界」セミナーから始めさせて頂き、心から感謝しております。

37年という短い生涯の中で、賢治はどうして童話という形式でたくさんの思いを書き残していったのか。それは次代への愛であったのだと思うのです。昨年の小学校公演の鑑賞前段で、私は子どもたちにこのように話しました。

「彼は自分の思いを、時間を超えて次代を担う子どもたちに伝えたくて童話にしたのではない。彼は共生を願っていた。動物や人間の間にあっても命には上下はなく一つひとつが尊いもの。まして人間同士であっても。彼の生きた時代は大き

な地震・津波や凶作、国が覇権的な戦争に突入してゆく頃だった。本当の幸いとはいったいどういう事なのか。賢治はそれを考え続けて生き抜いた人だった」と。

ゴーシュの舞台は、賢治がこの童話を書き進めた自身の創作的体験に、私たちも身を置くことができたなと思い作った構成舞台。チェロ奏者がゴーシュになり演奏し言葉を発する、邦楽奏者が笛や太鼓を演奏し動物たちや楽団員の言葉を伝える、朗読者はその時の状況や心情を語りまた楽隊長になる。童話の全編をそのまま通し、物語上の音楽登場箇所に実際に演奏を乗せるというものです。黙読で自らの間尺において読み進め、または読み返し想像する読書の、本来の鑑賞の素晴らしさは言うまでもないが、時には彼の心中にこの物語がどのように展開されていったのか、その速度と眼前に現れる光景を、論理的解釈や正解探しの暇を与えずに「彼と一緒にそこに居る『目撃的な感覚』で鑑賞することでの気づき」を探りたかったからでした。謎は謎のまま、滑稽、同情、共感、違和感もそのままに物事が進んでいく。その感覚を味わってもらいたかったからです。童話は本として、後からゆっくり、ひとり読書することはできるのですから。

「寝る間を惜しんで一生懸命練習するが、いつまでも楽団の中では一番ヘタで、いつも楽長に叱られるゴーシュ。しかし夜の自主練習の時に現れる動物たちによって、心が変わってゆく。気づいてゆく。感情表現や、音程やリズムのその音楽に対する正確さとそれが一辺倒なものではなく仲間と感じ合って作るものだということ、そして自身の演奏による社会的役割。至ってもいない自身のつまらないプライドが故に、技術だけの向上しか考えていなかったこと、仲間を受けいれずに周りが見えていなかったこと、自らの音楽が自分のためだけでなく世の中の役に立つものであったこと」など、ゴーシュの心の変容を子どもたちが物語の進む中で『目撃』し、自身の中に生起した何かの感情に気づいてもらえたのなら嬉しい限りです。

鑑賞の後の子どもたちの素直な輝きの感想、校長室で語られる振り返り会談での共感、感動で本当に涙が出てしまいました。校長先生はじめ先生方の教育者としての知見と子どもたちへの期待と

愛情に、また芸術・文学の役割について心強いご教授を賜ったことに感謝致します。この舞台をお届けして良かったと心から思えました。

「子どもたちは、まるで読書をしているような態度で聴き入っていた」と、ある校長先生から嬉しいお言葉を頂戴し、「そうか、これも読書のうちの一つでもあるのか。作家の執筆時の臨場感と同時に、物語を読み進めていく想像感覚を得られたのかも知れない。」と改めて認識させられ、また賢治さんから素敵な宝石を贈ってもらえたのだと感じました。

本公演はどこも田んぼや山に囲まれた自然豊かな町の小学校。畦には曼珠沙華まんじゅしゃげが咲いていて。

「賢治さん、あなたのお伝えしたかった思いを、まるであなたの生きた時のままの風景の中でお届けしてきましたよ。晩年まで推敲された「セロ弾きのゴーシュ」。あなたが亡くなった翌年に出版されたんですよ。もう亡くなられて89年経ちますが、いま私たちは子どもたちにお伝えしています。どうか、勝手をお許しください。賢治さん、大切な思いを、ありがとうございます。」



灯は君臨し

小説家 此瀬 朔真



墓前には誰もいなかった。新鮮な花束が九月の午後の微風に揺れて、辺りにはまだ線香の匂いが漂っている。

ライターを拝借して新しい一本を点す。溶けたガラスのように丸く赤く膨らんだ火は、眺めているうちにすっと揺れて消えた。蒼白い煙が細くたなびいていく。

手を合わせる。閉じた目蓋の薄い闇に、上空を飛ぶ鳥の羽音だけが届く。

目を開く。鞆から本を取り出して、包装が崩れていないのを確かめてから供えた。

本を書き始めてから数年が経つ。

ずっとやってみたかったことを、やってみたことに変える材料には大きな労力と小さなきっかけが必要だ。レシピなどももちろんない。何もかもが目分量で進む。

あらゆる局面において楽しいことばかりが続くわけではないし、特別強く望んでいるわけではないとき、つまり平熱で暮らしているときに些細なことで火蓋は切られる。さらには「始める」と「続ける」のあいだにも深く巨大な亀裂があって、それを飛び越えていくためにはまた異なる力が必要とされる。

それでも、いつもどこかで照らす灯があったように思う。

なかなかまっすぐには進まなかった私を、近く遠くで常に待っていてくれた。

いよいよ歩き出したときには、終わりのない荒野を渡るために寄り添ってくれた。そんなあたたかい光が。

淡い雲が不意に切れた。

私淑という手段を知ったのはごく最近だ。会うことは叶わなくても、その人を師とあおぎ、模範として学ぶ。目分量で転がる私は当然のように呼吸をするように迷う。そんなときには、あなたならばどうしますかと胸のうちに問いかける。

問いの形は無数にある。けれど、どんなときも答えは同じだ。

苦悩し、走れ。心に決めた方角へ。

それは、残された膨大な資料のうえに私が思い浮かべる生前の彼の姿と同一だ。金持ちの道楽と謗られようが、理解者を失おうが、若くして命を落とそうが、彼は、私の師は命を駆け抜けた。

聖人と呼ぶのは簡単だろう。自己犠牲は美しい。献身は尊い。博愛は涙を誘う。

無論、そのいずれにも私は背を向ける。

彼を祭り上げる暇があるなら学びたい。盲目に賛美するよりやるべきことがある。礼賛とは相手から遠ざかる行為だ。自分たちとかけ離れた存在だからこそ、人間は神を崇める。求めるのはそんな関係ではない。追いつくことはできないとしても、私はその背を追って走り続けたい。

未だ燃え尽きない線香の、細い煙が卵色の表紙に触れる。

そう願ってここまで来た。誰が手に取るかもわからず、万人に無視されることを覚悟で本を書いてきた。

どんな暗闇を進むときも、目の前にいつも灯はあったから。

先生、と私は呼ぶ。

お祭りがあるんです。一緒に行きませんか。

彼はきっと安らかに眠ってなどいない。人の世を黙って眺めるなんて到底無理だ。稲穂がいよいよ重く頭を垂れる季節などはなおさらで、今頃は田から田へと飛び回り、黄金の水面のように揺れる実りを撫でているだろう。

だから、話しかければきっと応えてくれる。

今夜、烏瓜の灯りをみんなで作ります。

宙をめぐる線路、一夜の巡礼、二人の少年の旅路。そのなかに現れる小さな停車場は、ここから離れた小高い山の途中に本当にある。次第に訪れるのが早くなる夕闇のなか、ぽっかりと浮かび上がる小さな駅舎にはいつも音楽が流れ人と物が集う。

今夜はそこへ、新鮮な緑色のころころと丸い実がやってくる。種をくり抜いて思い思いに細工を施し、小さな電球を宿らせ、紐でつるす。

去っていく夏の夜に漂う、小さな無数の光たち。

先生が来てくれたら、みんなきっと喜びます。だから、一緒に行きませんか。

まだ強さの足りない私の手を、差し出す。

静まりかえる午後。陽射しを浴びた手のひら。

ひび割れて土にまみれ、一心に生き抜いた手が

力強く掴むのを、確かに見た。

握り返せば命のように、灯のようにあたたかい。
ありがとう、先生。

ここへ立ち寄ってから向かう、と前もって連絡してある。日没もまだまだ先だ。だから急ぐ必要はない。それでも、駐車場の景色を一緒に見てほしかった。駅長がいつもの笑顔で迎えてくれるに

違いないし、宝箱のような駅舎には彼の好きだった鉱石もたくさんある。きっと退屈しないだろう。

さあ、行きましょう。

午後の陽はますます目映い。

踏み出した一步に、イーハトーヴの光が弾ける。

結 い — 賢治が繋ぐ心と心 —

縁をつくる

会社員兼書道家 南 遥香



私は中学生の頃から宮沢賢治の作品や生き方が好きで、よく本や資料などを集めていた。

と言っても熱狂的なファンというほどでもなく、いつか岩

手に住んでその存在をより身近に感じてみたいなあと思う程度の、普通の「賢治さん好き」だ。

そんな私は青森の出身で、趣味の書道をしながら地元の大学に通っていた。デザイン系の専攻だったが、長年培ってきた書道を伸ばすことに決め、在学中は小規模ながらも毎年個展を開いていた。卒業後は大学院に進み、さらに自分がやりたいことを突き詰めていこうかと考えていた。

やっぱり就職しようと思ったのは大学三年の二月。ちょうど私が就活をしていた時期はコロナ禍が始まって間もない頃。今よりも世間はピリピリしていて何をするにも周りの顔色をうかがうような生活をしていた頃だ。今でこそリモートはかなり浸透してきているが、当時はまだまだどこも試行錯誤していた時期。候補に入れていた企業は軒並み選考中止になり、かなり焦っていた。そんな中、縁あって花巻市内の会社に内定をもらうこと

ができた。

私は確かに宮沢賢治好きだが、特別岩手県、それも花巻市で卒業後すぐに絶対就職！というほどこだわってはいなかった。以前から度々旅行などで花巻を訪れることはあったが、まさか数年後に住むことになるとは考えてもみなかった。だが知り合いも伝手も全く何もない土地で、一から自分の世界を作っていこうという思いは強かった。だから進学はせず、自分の力だけで大学時代にやりきれなかったことを思う存分伸ばしていきたいと思った。

もともと本を読むことは好きだったが、賢治さんだけはまた違った存在に感じる。それは童話・詩人としてだけでなく、宗教や農業など様々な知識を持った存在だからだろう。多くのことに興味を持ち、知識の引き出しが多い人は人としても魅力的な存在だ。それは現在でも同じだろう。私自身も作品を作るうえで直接関係の

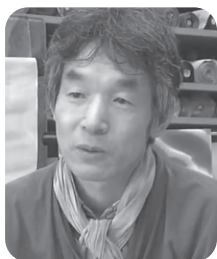


ある分野だけでなく、一見畑違いだと思う分野でも、もしかしたらこの経験がいつかのちの自分を助けることになるかもしれないという姿勢で謙虚に学び続けていきたいと感じる。

いつか賢治作品を取り入れた個展などを開けたらどんなにいいだろう。賢治さんが実際に見て感じた景色の中で自分の夢を追えることをとても嬉しく思っている。人生は何が起こるか分からないものだ。まだまだ自分に足りないものを補うために、私はここへ賢治さんに呼ばれていたのかもしれない。

折々の宮沢賢治

せがわ京染店 瀬川 卓哉



長く花巻に暮していると、ちょっとしたところで宮沢賢治の「まいたタネ的なもの」に触れることが、少なからずあります。

私の住まいは花巻市鍛冶町の

J R 東北本線の脇なので、「賢治の産湯の井戸」が現存する「宮沢商店」も町内のすぐそこ、という「あたり前」の中で日々、暮しています。

その「あたり前」の中で生涯を過ごした父や祖父にも、やはり賢治に関係した話がありました。

まず、祖父ですが、明治 33 年（1900 年）生れなので明治 29 年生れの賢治とは 4 つ違い。

幼い頃はかなりの腕白だったようですが、けがからの骨膜炎により生涯、松葉杖での生活。他に赤痢等大病にも罹り、学業は小学校途中までとの事でした。青年期に訳あって、兄弟間で家業を代替わり、経営せざるを得ない状況となり、大変な苦勞もしたようですが、一方で仏教（浄土宗）にも篤く、親しい友人と仏教談義に講じたり、また昔話の名人的語り部として、近所の子ども達や孫たちにせがまれては語り聞かせる好々爺でもありました。（後に、聞き取りによる祖父の「昔話集・嘘吉と泥吉」も出版されました。）

そんな祖父だから、きっと宮沢賢治にも共感を抱き、もしや何らかの接点もあったのではなかろうかと、ある時訊ねてみました。すると、意外に

も祖父の答えは、（はっきりした言葉では言いませんでしたが）「あつたなやづ（奴）」（あんな”道楽？”者）と言ったニュアンスの、ある種否定的なものでした。それは、自分にはいささかショックだったのですが、のちのち考えるに、大正～昭和初期の封建制や家父長制がまだ色濃く残る東北の一地方にあって、まして有無も言えずに、相当厳しかったであろう家業を継ぎ支え、維持した祖父からすれば、あのような言葉が出たのも分らないではありません。

おそらく、当時の花巻の町場の人たちの賢治を見る目も、大概はそんな感じだったのではないのでしょうか？逆に賢治にしてみれば、そんな花巻の世間の環境・立場に置かれながらも、あのような創作の世界を持ち続けた、ということになります。

ところで、祖父には賢治没後に「国訳妙法蓮華経」が贈られています。それがどういう経緯だったのか、今となっては確かめようもないのが残念です。

さて次に、父に関してですが、大正 14 年（1925 年）生まれの父は運動神経が良く、自他とも認める剣（道）の人でした。家業の傍ら、とにかく稽古好きで励み、昭和 47 年、当時花巻でもいち早く「剣道七段」に昇段しています。

日常生活の中でも稽古的なエクササイズを取り入れるような父でしたが、私が中学生だった時のある晩遅く、上機嫌に歌を歌いながら帰ってくるのが、家の中からもわかりました。

多分「剣友会」の酒席の集まりの帰途だったと思うのですが、その時、同じ「剣友会」仲間の近所のおじさんと一緒に歌ってたのが、「風の又三郎」。ふたりで「♪どっどど どどうど どどうど どどう」と、夜の鍛冶町に響き渡るような大声で歌いながら帰ってきたのでした。そんなふうにも父親たちの世代に又三郎は入っていたのです。ちなみに父と同級生だった、この近所のおじさんは、あの「高喜ラヂオ」（賢治がたくさんレコードを注文した店）の主人です（花巻まつりの山車の花づくりの名人でもありました）。

「風の又三郎」といえば、私が小学校 1 年の時（1967 年）、今はない「中央公民館」で上演された市民劇「風の又三郎」を観に行った記憶があります。当時の事なので、さほど凝った演出や舞台セットではなかったと思うのですが、あの又三郎に感じた何か不思議な感覚は今も残っています。

また、小学2年の時には国語の教科書に「よだかの星」がありました。子供心にも何ともやるせなく切ない気持ちになった事も憶えています。

現在、花巻の各小学校では学習発表会で賢治作品を採りあげ、子ども達が工夫をこらし、劇中の登場人物として微笑ましく熱演しています（賢治の母校でもある花巻小学校では「賢治集会」として続いています）。また、我が家の子ども達が小学生だった頃、「小学生のための宮沢賢治」という副読本（監修・宮沢清六）が花巻市教育委員会から配られていました。

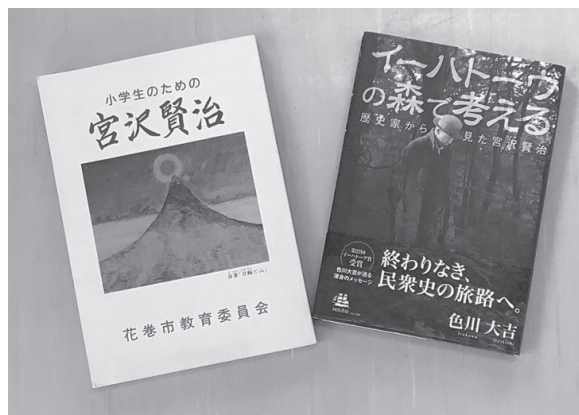
さて、私も東京の大学に入り花巻を離れると、ひとつ距離をおきながら、また一種のノスタルジック的動機から時々、宮沢賢治を読むようになりました。専攻したゼミの教授（歴史家の色川大吉先生）が、日本近代史を民衆＝草の根の視点から検証しつつ、キーパーソンの一人としての宮沢賢治にも言及されていました。時代の荒波に翻弄されながらもコスモポリタンの視点を持ち続けた宮沢賢治の特異さや、立ち位置などを教えていただきました。

「賢治生誕100年」の折には、「色川ゼミ」の現役やOBの皆さんが先生と共に来花。私どもが企画・開催した「賢治の彩を求めて」作品展（なはんプラザ）にも来場いただきました。また、私が図らずも「宮沢賢治学会理事」を仰せつかってい

た時分に、色川先生が「イーハトーブ賞」に推挙、承認されたのはなんとも嬉しい事でした。

残念ながら色川先生は令和3年、96歳で逝去されました。残された時間を宮沢賢治の再発見と「不知火海民衆史」の完成に捧げたい、と記されていただけに、とても残念です。

ところで、自分は「染色」を生業としております。宮沢賢治の作品からイメージを膨らませたものも多く作らせていただいております。宮沢賢治は音楽を聴くと、色彩が見えてくるという「共感覚」の持ち主だったそうです。ということは逆に自然や美術創作物などの色彩を目にした時、音が聞こえる事もあったのでしょうか？もし、そうだとしたら、仮に私が染めたものを賢治が目にした時、どんな音が聞こえてくるんだろう？そんなことを思ったりもしながら染めています。



■「雨ニモマケズ手帳」公開記念講演

株式会社林風舎 宮澤和樹 様

令和4年9月19日（月）、「雨ニモマケズ手帳」の実物公開を記念して、株式会社林風舎の宮澤和樹様の講演会を開催しました。当日は50名以上のお客様にお集まりいただき、「雨ニモマケズ手帳」とは、賢治さん自身にとってどのようなものだったのかというお話や、桜町にある「雨ニモマケズ詩碑」にまつわること、賢治さんがどれだけ音楽を愛していたのかなどをたっぷり聞かせていただきました。また、祖父の清六さんから聞いていたということや、“賢治さんが今生きていたら

どう感じるか”という言葉もとても印象に残りました。



■開館40周年記念行事

胡四王神楽保存会 様

令和4年9月21日(水)は、宮沢賢治記念館が開館して40周年の節目でした。記念館行事として胡四王神楽保存会の皆さまに「権現舞」を披露していただきました。用意した座席は満席になり、立ち見も含め40名以上の方が集まってくださいました。初めて神楽をご覧になる方もいらっしやったためか、緊張感が漂うなか、お囃子、演舞と進んでいきました。権現様の口で頭を噛んでもらう「頭かじり」は、災難や疫病を退散させ、

厄をはらうことができるとされており、多くの方が前方へ出て行き、順番に頭をかじってもらい、喜んだご様子でした。



■「賢治の世界」セミナー 2022

12年目となる「賢治の世界」セミナーを、花巻市内の小中高校を会場に開催しました(市内16校17会場1,356名《昨年実績:17校18会場1,513名》)。今年度初めて参加してくださった、マリヴロン楽隊の皆さま。童話「セロ弾きのゴーシュ」をチェロと、篠笛、和太鼓の調べにのせて朗読舞台を披露してくださいました。「まるで物語に入り込んだみたいだった」、「楽器を演奏しながら登場人物の演技もしていて驚いた」など、子どもたちからも感動の声が届きました。「実際にチェロの音を聞きながらゴーシュの演技を見ていると、心情の変化が分かってよかった」という声もあり、表現で伝える素晴らしさをかみしめていた様子でした。



■「賢治の世界」ワークショップ 2022

《イーハトーブの風景地・釜淵の滝地質探訪》

花巻市民を対象に宮沢賢治ゆかりの地を訪ねて歩く、「賢治の世界」ワークショップ。令和4年11月20日に開催した回は、花巻温泉から歩いてすぐ近くにある「釜淵の滝」でした。地質調査会社にお勧めされていた對馬博様に解説をお願いし、10名の参加者と現地を訪れました。「台川」という作品にその場所の様子が書かれています。ポットホール(壺穴)の解説の際は、釜淵の滝の上のほうまで行って観察しました。滝のいたるところに大きな穴が空いていて、その中に大きな岩が入っている様子に驚きました。また、川べりで黒曜石をハンマーで割ってみるところもあり、その破片は鋭く、昔は鎌(やじり)に使われていたというお話もありました。賢治作品と照らし合わせて歩いてみることで、とても身近に感じ、作品に親しみがわいてきました。



《特別展》のお知らせ

◆特別展「童話 カイロ団長」

期間

令和4年10月1日(土)

～令和5年5月7日(日)

自筆草稿の公開：

令和5年4月29日(土・祝)～5月7日(日)

13－24枚目

大正10～11年に書かれたとされる作品で、他の作品の裏面に書かれた下書き稿8枚と清書稿24枚が現存します。公開するのは、清書稿のみですが、パネルでは下書き稿の詳細や作品の解説について展示します。



◆特別展「銀河鉄道の夜」

期間

前期：令和5年5月13日(土)

～9月10日(日)

後期：令和5年9月16日(土)

～令和6年2月12日(月・祝)

宮沢賢治没後90年となる令和5年は、映画「銀河鉄道の父」(5月5日から)が公開となり、そのタイトルとも関連があることから、賢治の長編作品「銀河鉄道の夜」についての特別展を前後期の二期に分けて開催します。

会期中には全83枚プラス創作構想メモ1枚の草稿を公開し、賢治と作品の魅力を再確認していきます。

自筆草稿の公開：

①5月13日(土)～21日(日) (9日間)

②7月15日(土)～23日(日) (9日間)

③8月11日(金・祝)～20日(日) (10日間)

④8月22日(火)～27日(日) (6日間)

⑤9月16日(土)～24日(日) (9日間)

⑥11月23日(木・祝)

～12月1日(金) (9日間)

⑦令和6年2月3日(土)

～12日(月・祝) (10日間)

◆特別展「山男の四月」

期間

令和6年2月23日(金・祝)

～5月6日(月・祝)



「山男の四月」は生前に発表された唯一の童話集『注文の多い料理店』に所収されている作品の一つです。9編からなる童話集の原稿は残念ながら現存しませんが、「山男の四月」については初期形といわれる草稿が残っており、その構想の様子をみることができます。童話集掲載の発表形と比較しながら作品の魅力に迫ります。

自筆草稿の公開：

令和6年2月23日(金・祝)

～3月3日(日) (10日間)



編集後記

宮沢賢治ファンの方と交流がしたい、いつもそんなことを考えています。もともと埼玉県に暮らしていた私は、中々巡り会うことができませんでした。そこへ行くと花巻は、賢治関連の施設やイベントも多く、賢治ファンの仲間と知り合えるチャンスにあふれているというわけです。今回寄稿してくださった此瀬朔真さんもそのおひとり。文芸サークル「月浜定点観測所」の代表をされていて、宮沢賢治童話村近くにある「白鳥の停車場」というお店で出会いました。ご自身の作品もここで販売されています。此瀬さんの小説は、普段なにげなく目にしているものが、どれだけ愛おしいかを思い出させてくれるような魅力があります。一緒に賢治さんについて語り合えば1時間なんてあっという間です。自分だけで考えているよりもはるかに深く思考や視野を広げることができる。花巻で暮らしていて、それがとても幸せなことだと思うのです。(Y.S)